

CMYK 4色のかげ合わせで

服部一成

CMYK 4色の大小のドットの集合体で構成されている印刷。
ドットの大きさと重なりの変化で、色は無限に変化する。
この法則をアレンジして、ドットを線に変えてみた。
CMYKの線が水平・垂直、斜めに交差しながら色面を形づくる。

——作品コンセプトをお聞かせください。

C (シアン)、M (マゼンタ)、Y (イエロー)、K (ブラック) 4色の線のかげ合わせで色を表現しようと考えました。通常の印刷は、網点(ドット)の大きさと重なりを変化させることで色や調子を表現しています。それが当たり前という感じで普段は仕事をしているのですが、もしもドットではなく線だったらどうだろう。線の太さで色調の変化を表現してみたらどうなるだろう。網点の原理はわかっているので、これを線の太さに置き換えても色を表現できるはずだし、線を粗くすれば、線が重なり合う表情が、面白い効果になりそうな気がする。そういう大雑把な思いつきから、実験を始めてみました。

——まず作成したのが手描きの線を使ったカラーチャートでしたね。

そもそも「手描きで網点を作る。それには、点より描きやすい線で」という発想だったんです。それで20%から100%まで太さを描きわけた線を、それぞれ縦、横、斜め45度に振りわけてカラーチャートを作ってみました。これがなかなか面白くて、遠くから眺めるとかなりきちんとカラーチャートに見えます。この色校を事務所の壁にズラッと貼って毎日眺めながら「さて、この先どうしようかなあ」と悩んで、試行錯誤を積み重ねていったわけです。当初はCMYKの4色の線で写真を表現することを考えていました。スキャンした写真をCMYKに1版ずつ分けて、それを濃度に合わせて線で描こうとしました。でもこの方法だとスケッチみたいになってしまって、どうしても写真っぽくならない。Y版とK版は元の写真のままで、C版とM版だけこうやって手で描いてみました。C版は途中までですが…。カラーコピー機でブラック、シアン、マゼンタ、イエローの順に版を重ねてシミュレーションしましたが、この方向は行き止まりだと思ってボツにしました。

——それでどうしましたか？

絵柄をもっとシンプルな色面構成にして、手描きの線のかげ合わせでやってみることにしました。風になびく三色旗とポール、それに背景、合わせて5つの面で構成されたグラフィックです。実験で作った

カラーチャートを眺めていて、この表現の面白さは平行線の網の目が見えるところだから、もっとずっと線のピッチを粗くしようと思いました。CMYKそれぞれの線の太さを描き分けたイラストをMacで作り、これを下書きにして1版ずつ手描きで線を描き込みました。写真の時と同じように1版ずつカラーコピーで単色コピーして重ね合わせて…。ところがこれもうまくいかない！手描きだからきれいな直線じゃないでしょう？そこがいい質感になると予想してたのに、単純な構成なのに稚拙さが目立ってしまっ。色面の境目が見えきれいな見えない。試しに、旗のカーブのところをイラストレーターでマスクをつくって修正してみたんですが、なんか余計に中途半端になってしまっ。

—それで直線に変更したんですね。

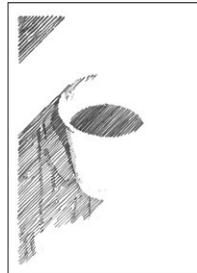
チャートをつくった当初は「線」と「手描き」の二つの要素がうまく具合に合わさっていい感じになるだろうと予想していました。ところが実際に色面の面白さを見せようとすると、この二つの要素が喧嘩しているようで。それで思い切ってコンピュータの直線で作ることにしました。今まであった「線」と「手描き」という二つの要素のうち、「線」に絞ったんです。実際、こうすることで「CMYK 4色の線のかげ合わせで色を表現する」というコンセプトがはっきりしたように思います。グラフィックとしてはとてもシンプルな表現になったので、今度は5枚のポスターにバリエーションをつけることが重要になりました。

—配色や線の間隔とかですかね？

モニターで見ているときは4色がかげ合わさった複雑な色のほうが魅力的に思えたんですが、いろいろ試した結果、かけ合わせの少ない部分があったほうがクッキリした印象になることがわかりました。それに間隔が違ったりかなり印象が変わります。さらにブラックは暗くて、イエローは明るいといったようにインキの見え方も違うので、どの色をどの角度にするかによっても印象が変わることもわかりました。はじめは横線をマゼンタにしていたんですが、これだと線の太



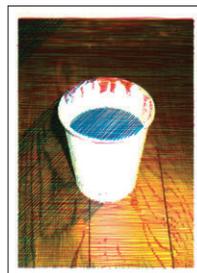
原稿



C版



M版



写真のSM版、イエロー版に手描きシアン版、マゼンタ版をカラーコピー機で重ねた実験

さが切り替わる旗のカーブのエッジ部分が目立ってしまうので、明度が高く紙白とのコントラストが弱いイエローを横線にしました。これでエッジのガタガタが目立たなくなりました。用紙もいくつか試した結果、インキの盛りがいい紙にしました。CMYKのインキが重なっている感じがとてもよく表現されています。

—「CMYKの線をかけ合わせる」というイメージは実現できましたか？

もともと漠然と考えたことは、CMYKのかけ合わせという、今ある印刷の構造そのものを表現テーマに転換できないか、ということでしたが、結果的にはその狙いを実現できたと思います。でも最初からコンセプト通りにスッキリとはいきませんでしたね。いろいろやっっては手を加えて、また考えて…そうしてようやく辿り着いたという感じ。それにしても、やっぱり印刷物は面白いと思いました。グラフィックデザインって、プロダクトや建築なんかと比べると素材や機能による拘束が少ないところがおもしろいし、その自由さが好きなんです。紙という素材にだけはすごく思い入れがある。もしもグラフィックデザインの仕事が印刷物をつくるのが中心じゃない時代に生まれていたら、きっと僕はグラフィックデザイナーになるなんて思わなかったんじゃないかな。



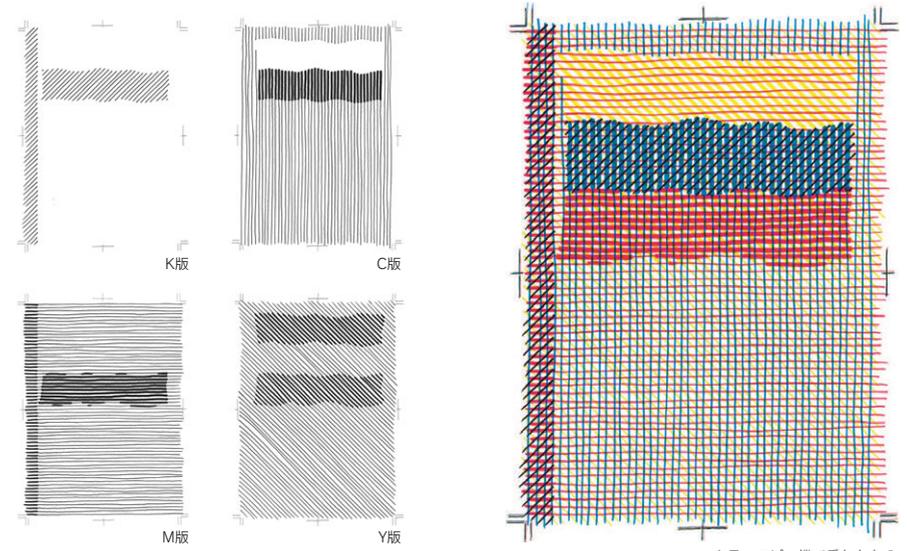
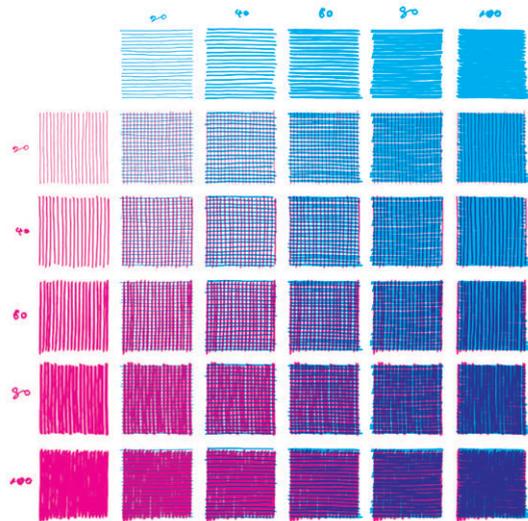
服部一成 トライアルプロセス

用紙：ルミネッセンス/マキシムホワイト



線のかけ合わせで カラーチャートをつくる

手描きの線を原稿にカラーチャートを作成。縦、横、右45度、左45度の4種の線をCMYKの4色で印刷。かけ合わさる線の太さの変化で色を表わす。

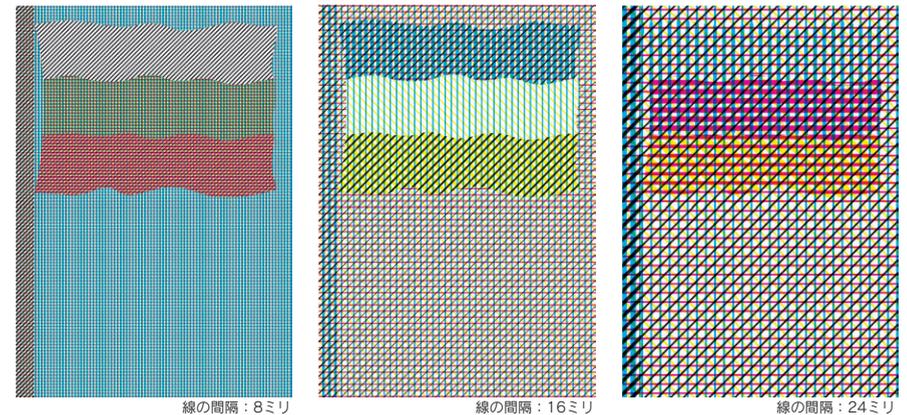


色面によるグラフィックづくり

三色旗をモチーフにしたグラフィックを手描きの線で作る。CMYKの各版をそれぞれの色に応じた太さの線で描きわけて作成。手描きの味が逆に稚拙な印象を与えるため最終的に直線でデザインすることになった。

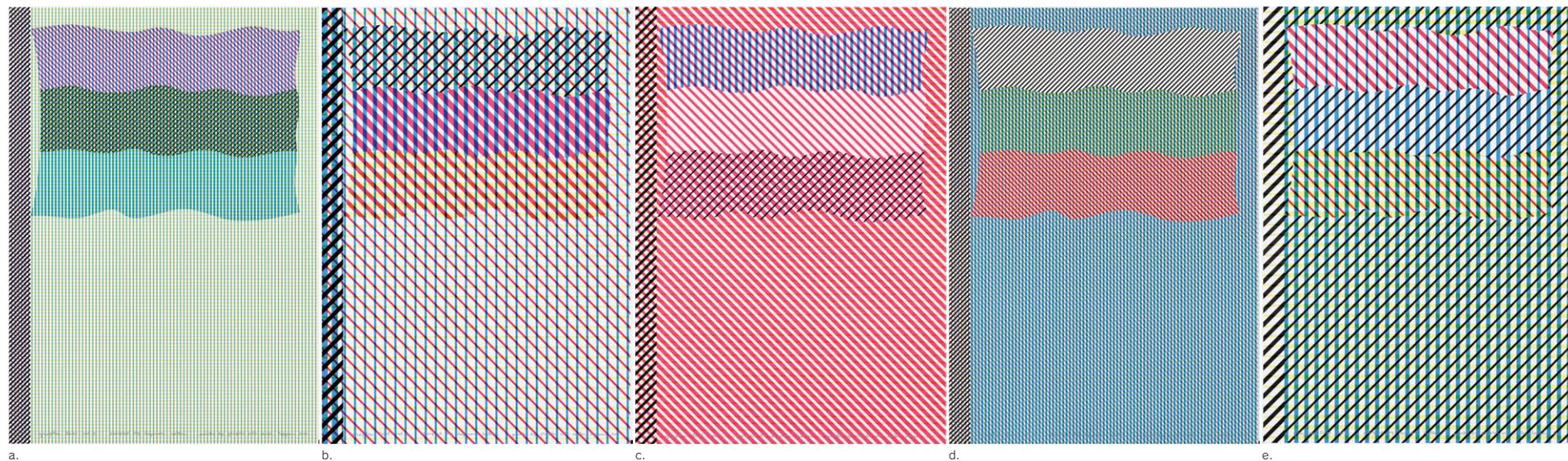
カラーコピー機で重ねたもの

用紙：ルミネッセンス/マキシムホワイト

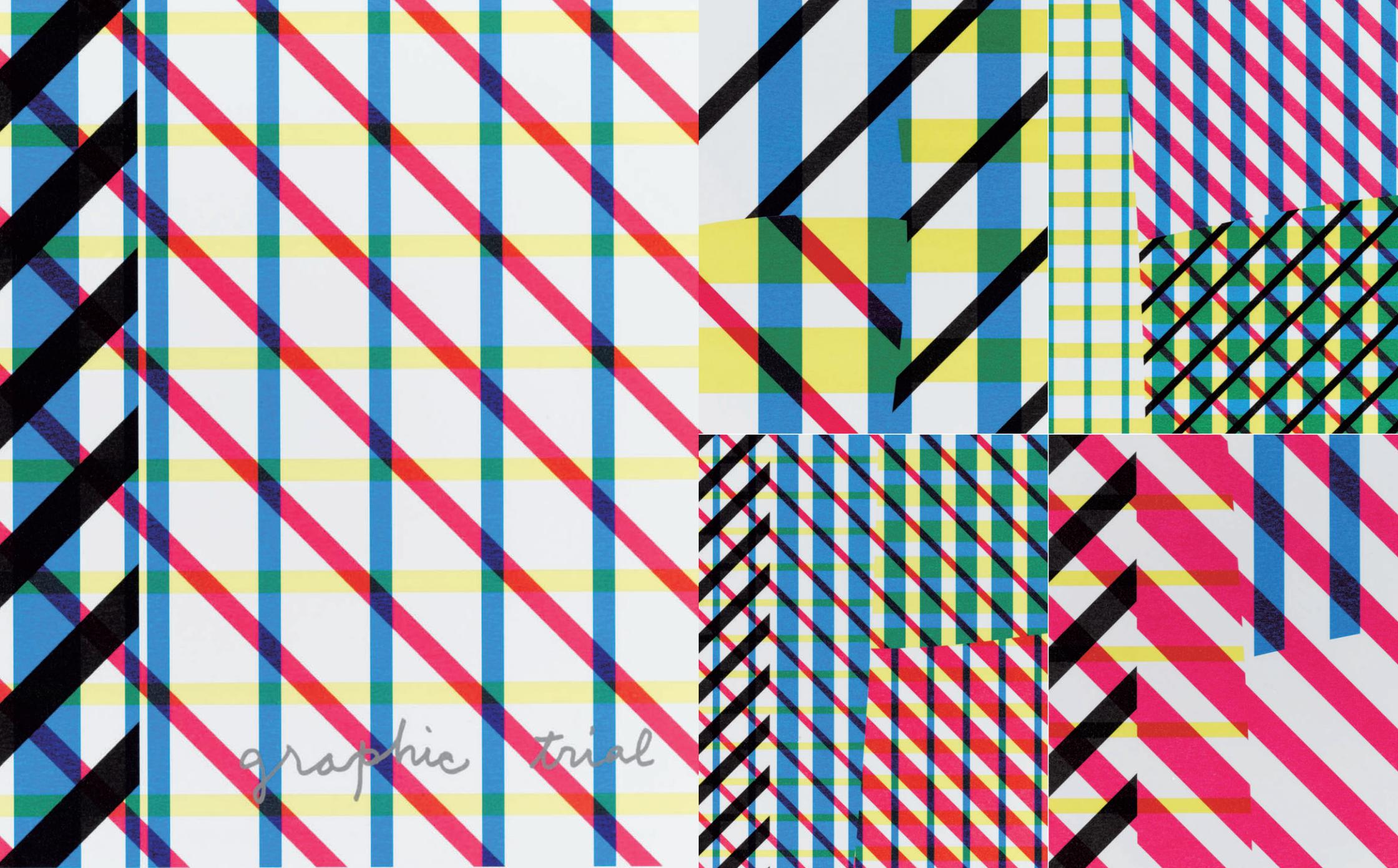


線の太さと間隔を見比べる

線の太さと間隔が異なる3種類のグラフィックを原寸大で印刷。その違いが、どのような印象を与えるか見比べる。モニタで見るのと原寸大では全く印象が違う。



用紙:グアンマーボV / スノーホワイト 四六判 135kg 版の構成:プロセス4色→銀 (a.b.c.d.e. すべて)
※展示作品は仕様が変わる場合があります。



design detail

b.	e.	a.
	d.	c.

原寸で表示しています